

開催地名：千葉県市原市	
開催日時	令和2年1月25日（土） 13:30～15:00
開催場所	市原市市民会館 小ホール
語り部	小松 三生 （岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織、関係者 約400名
開催経緯	<p>本市域は、地震、津波、暴風、豪雨、洪水、高潮など極めて多種の自然災害が発生しやすい自然条件下に位置する。特に地震については、今後30年以内に震度6強の大地震が70パーセントの確率で発生すると千葉県は予測しており、防災対策の一層の充実強化が求められている。</p> <p>災害の発生を完全に防ぐことは不可能であることを認識し、災害時の被害を最小化し、被害の迅速な回復を図る「減災」を進めるためには、平時から正しい知識を持ち、自らが考え、行動することの重要性を再認識し、「自らの命は自ら守る」とする自助、「自分たちの地域は地域の人々で守る」とする共助の考え方の重要性を再認識する必要がある。今回語り部の講演会を開催することで、関係各位の防災意識の啓蒙を図りたい。</p>
内容	<p>（1）東日本大震災について</p> <p>陸前高田市は、17.6メートルの津波により壊滅的な被害を受け、死者・行方不明者はあわせて1,759名、被災世帯は4,023世帯に及んだ。市役所、消防署、交番、公民館、病院、銀行、火葬場などが一度になくなった。家が崩壊するのではないかと思うほどの揺れだった。警察車両、消防車両、無線機などの設備も失い、3日後にようやく消防本部と連絡を取ることができた。岩手県と宮城県の県境に位置している陸前高田市は、岩手県の行政無線に沿って行動したが、岩手県と宮城県が発表した津波の高さに関する予想は異なっていた。岩手県の発表は宮城県のものより低く、被害が大きくなったとも考えられる。被災者の中には、避難誘導を行っていたため、亡くなった方もいる。自分の命は自分で守るということを頭に入れて行動してほしい。</p> <p>（2）避難所運営</p> <p>地震後、小泉地区会館という集会所を避難所として開設したが、50畳の大広間と数部屋の小部屋という環境で、97名が生活するのは非常に狭かった。なお、避難所を開設する場合には、事前に建物の外回りと内部の安全確認を必ず実施してほしい。</p> <p>私の居住する地域では、幸いにも東日本大震災の前に、必要最低限の防災資機材を購入していたため、避難所の活動をすぐに始めることができた。毛布などは一部不足していたが、近隣の家から借りてしのいだ。避難者の名簿作成などの避</p>

難所運営とともに、危険物の回収なども行った。大災害が発生すると盗難も発生するため、そういった点にも十分注意してほしい。

(3) 自主防災組織の役割

避難所運営の他にも、対策本部から依頼されたことがあった。小泉地区の被災者を、中学校の体育館に搬送してほしいとのことだった。自主防災組織の役割はより多くの人を助けることが目的で、搜索や搬送は役割ではない。しかし、消防団は被災しており対応が難しかったため、自衛隊として働いた経験のある人などを含めたチームを組み、被災者の搜索と搬送を行った。

自主防災組織は、「自分たちの町は自分たちで守ろう」という考えを基本精神とし、いつでも必要な対応ができるようにしておくことが重要である。大震災時は、道路の陥没や倒壊物等が想定されるので、消防車両の利用は難しいと考えたほうが良い。また、阪神淡路大震災時は、地域の被災者は地域の住民自身で救助された。この姿勢はきわめて重要だと思うとともに、どこの地域でも見習うべきことだと考える。

(4) 避難所運営の課題

一般的に、男性より女性の方が、避難所内の細かい部分に目が届く。女性視点での取り組みは非常に有効だと思う。しかしながら、食事の準備から要介護者の対応、掃除や洗濯等、避難所内の仕事がどうしても女性に集中してしまう。これに付随して、感情的なトラブルや不満も出てきたことは否めない。男性にも、そのあたりの配慮をしてもらうことは必要で、とにかく役割を分担して対応していくこと、毎日ミーティングを開いて、役員の決定と今後の方針等を協議し、情報を共有化していくことが大切だと思う。



開催地より

「自分たちの町は自分たちで守ろう」という自主防災組織の基本精神について、わかりやすくお話いただいた。今後の地域全体の防災力向上につなげていきたい。